

括られるものにはいったいどんな「モノ」が含まれるのかという点である。言い換えれば、この言葉と親和性のある資源とそうでない資源があるようにも感じられたと言ってよいかもしれない。より端的に言えば、第3部で対象となった事物、すなわち「ジュズダマ」「乳加工品」「山村と住民」をこのように並べてみると、事物と人とのあいだにはその関りかたにおいて「精粗」「濃淡」があって、その関わり方が「粗」「淡」であればあるほど「生態資源」として認知しやすいというような傾向が、この言葉には含まれていないかという疑問である。人里という人が作った環境に育つジュズダマと、人によって養育される家畜がともに「生態資源」として括れるのかどうか。これがイネやムギのような世界各地で栽培される作物であっても「生態資源」として括れるのかどうか。こういった点も、ぜひ議論してほしいところである。

本書が定義している「生態資源」(p.6)が包含している領野は非常に広く、農業や畜産業、そして人々の生活空間も「生態資源」に包摂されているので、第3部で扱った「ジュズダマ」「乳加工品」「山村と住民」も当然ながら「生態資源」として括ることができるものの、それをより具体的にどのような事物として措置していくのが、今後、「生態資源の未来」を論ずるうえで重要な論点になるはずである。幸い本書の著者たちは、長年にわたって科学研究費等による共同調査を実施してきたので、今後も同様なアプローチでここで取り上げた「生態資源」に関する調査を継続されるに違いない。そのときには、これらを「生態資源」として括ることから見えてくる「世界」がより鮮やかに描かれるものと期待している。

(田中耕司・京都大学名誉教授)

#### 参考文献

内堀基光(編). 2007. 『資源と人間(資源人類学01)』. 東京: 弘文堂.

大野昭彦. 『市場を織る——商人と契約: ラオスの農村手織物業』 京都大学学術出版会, 2017, iii+562p.

本書は、開発経済学者として知られる大野昭彦氏が、20年におよぶラオス手織物業の観察を通じて、市場形成の過程を実証的に論じた研究である。550頁余におよぶ大著であるが、序章および第I部で示された議論の枠組みによって、浩瀚な個別事例からもたらされる情報が「演繹的」(p.25)に整理・説明されていくため、著者の主張は読者に明瞭に伝わってくる。

序章によれば、本書のベースとなっているのは、情報が不完全で、取引費用が存在する現実の社会において、どのような商人がいかなる作法=契約で市場を形成していくか、という問いである。取引を安定的に実現させる市場統治メカニズムとして、これまでも近代法によるフォーマルな統治の形成や、共同体(コミュニティ)ないしはギルド・株仲間による集団的なインフォーマルな統治が、開発経済学や新制度学派の歴史学の中で議論されてきた。しかし著者は、ラオス手織物業での市場取引において、これらの市場統治のメカニズムはほとんど機能していないとする。それにもかかわらず、1980年代の自由化以降、ラオスでは「織物ルネサンス」ともよばれる手織物業の興隆が見られるのはなぜか。手織物の取引は、「お得意様関係」として知られる相対取引の中で行われている。著者はここに、契約当事者間によって創出・工夫される「個人的統治」のメカニズムを見出した。その中核は反復取引であり、それが当事者双方に協調行動——契約の維持・裏切りの抑制——を促すことで、安定的な市場取引を成り立たせる(その理論的根拠は、無限回の反復囚人のジレンマ・ゲームでは協力がナッシュ均衡として成立するとするフォーク定理)。これに、契約上の軋轢を回避する事前の措置として「適切な契約形態の選択」と「贈与交換」、事後の措置としての「契約条項の状況依存的な変更」がサブ・システムとして加わることで、「自生的秩序」としての個人的統治が機能することになったとされる。

第I部は、この個人的統治による市場形成の観

点から、ラオス手織物業の特徴と論点が整理される。市場形成のありようは、財の性質によって規定されるとする見方を基盤に、まず主として考察の対象となる織物が、伝統的衣装用の紋織物（シン）であること、紋織は複雑な意匠を「垂直紋綜統」を用いて表現することができ、織柄が織物の評価を決めるポイントであることを確認する。この特性は、織柄情報の伝達が規定的な意味を有する、織子に一定の技能が要請される、複雑な文様表現のために原料糸の量目管理が難しい、など織物の取引契約に大きくかわる要素を含んでいた。

それを踏まえた取引契約の分類作業が、本書での事例分析の参照基準を提供することになる。織物の取引契約の形態として、製品の授受にとどまるケース（スポット契約、注文契約）と、原料糸の供給をとまう契約に大別したうえで、後者を糸の掛売と製品織物の買い取りを組み合わせた糸信用貸契約と、原料糸供給と織賃支払いの組み合わせである問屋契約に峻別し、加えて問屋契約が織柄情報伝達に固有の意義を有していたことを明示している。糸の掛売による糸信用貸契約では、織子側が糸の所有権を有するゆえに窃取はおこらないが、製品の第三者売渡や織柄の剽窃は起りやすい。他方問屋契約は、織元側が織柄情報を内包する綜統や製品織物の所有権を有するため、その管理は可能であるが、糸の窃取を防ぐことは容易ではない。このように、この両者を区別することは、供与を受けた側（エージェント）によるエージェンシー問題（糸や織柄の窃取）の考察にとって鍵となる。またこの観点からは、内機（集中作業場）も織子との関係が最も強く、労務管理によってエージェンシー問題を回避できる契約形態として、上記の4つの取引契約と同一平面上に位置づけられることになる。この取引契約の枠組みに準拠して、以下では諸事例から得られる浩瀚な情報が、整理されていく。

第Ⅱ部は、最大の都市ヴィエンチャンに在る二つの市場（タラート）の観察から、財の特性によって、市場形成の様相が異なることが明らかにされる。タラートには複数のシンの小売店が軒を並べているが、製品品質の見極めが可能なシン（紋織物）では、消費者への販売に際して固定的な関係

は生じない（完全情報の探索財）。注目すべきは、小売店が織物を仕入れる際の取引契約である。中級・低級品を扱うタラート・クアディンの小売店では、織子の売り込みによるスポット契約、ないしは織子へあらかじめ製品を注文する注文契約が採られており、固定的な取引関係の要素は薄い。これに対して、高級品を扱うタラート・サオでは、小売店が図案師の役割を兼ねる場合が多く、流行の織柄を創案し、それを「垂直紋綜統」に体現し、原料の生糸とともに織子へ渡す問屋契約が広範に見られた。これによって、小売店は高品質の売れ筋の製品を安定的に確保することができるし、織子の側も高価な原料糸調達の際に直面する信用制約を回避することができる。しかし問屋契約には、糸の窃取の問題が伴う。小売店の結託による多角的懲罰戦略は、優れた技能をもつ織子を囲い込むことを望む小売店が情報提供に消極的なために機能せず、またそれらの織子たちは、ヴェトナム戦争時にヴィエンチャンおよびその周辺に移住したディアスポラ（離散定住集団）に属するため、ヴィエンチャン出身の小売店がコミュニティ機能を利用した統治を行うことも難しい。安定的な取引関係は、個人的統治に委ねられることになるのであり、実際小売店は、贈与交換を含む様々な配慮によって、固定的関係の維持をはかり、裏切り行為（エージェンシー問題）の抑制に努めていた。

1997年のアジア通貨危機による取引契約の変容は、このロジックを例証している。ラオス通貨の下落による海外産の原料価格の上昇は、織子に糸の窃取や製品織物の第三者への転売の誘因を与えた。長期的な関係の維持よりも、「裏切り」による現在所得の獲得が最適反応となる状況が生じたのである。それに対処して、小売店は糸信用貸契約への移行を選択するが、織柄の窃取の可能性が高まるこの契約下では、織柄情報の供与に消極的とならざるを得ない。その結果、流行に対応した高級紋織物の取引が滞り、中・下級品取引が中心となった。著者によれば、それは個人的統治システムの下での「市場の劣化」であった。

第Ⅲ部では、大消費地のヴィエンチャンとその周辺に現れる織元が観察の対象となっている。多様な織元の豊富な事例の紹介があるが、特に市内

の織子の相対的な不足への対応として、出機によって郊外への外延的な拡大を図る織元と、織物地帯のフアパン県などからの出稼ぎ織子を集めた内機経営（集中作業場）へ乗り出す織元が、並行的に現れている点が注目される。前者では、外延化にともなう距離の拡大が市場形成において克服すべき問題であり、織元はエージェンシー問題の程度に応じて取引契約を選択し、場合によっては委託仲買人を介して織元—織子関係を重層化することが試みられた。後者の内機経営については、それが市内での織子払底への対応策としての出稼ぎ織子への依存を契機としていたこと、そこで生じる労働費用の固定化が、効率的な労務管理の導入を要請し、ひいてはそれが相対的に高い労働生産性の実現へと繋がっていたことが論じられている。

最後の第IV部では、ヴィエンチャンからは距離があり、大消費地からの直接管理がなし得ない4つの織物産地について、地域の商人・織元による市場形成の様相が活写される。独自の織柄を産し織物の宝庫として知られるフアパン県では、海外市場や都市部とのコンタクトを経る中で地元から商人・織元が現れた。ヴェトナム商人の持ち込んでくる生糸、そして相対的に高価な金<sup>おさ</sup>織を問屋契約によって織子に提供し、比較的高級なシンの調達・販売を展開する織元も存在した。これに対してシェンクワン県は、同様の織物資源を有しつつも、距離の問題からヴェトナム生糸商人が入ってこないこと、農業事情がよいために織賃が比較的高いことなどから、織物生産はむしろ低迷していたとされる。ルアンパバーンは、経済自由化によってタイ市場へ接近し、地元からタイ向けの集荷問屋も現れてくるが、経済危機を契機に輸出市場は低迷し、かわりにユネスコ世界遺産の指定によって増大した海外旅行者へ向けた生産が盛んとなった。最後に、もともと自家消費が多かったサイニャブリー県の事例が紹介され、海外需要向けにアジア綿・茶綿を利用した、安価だが特徴ある織物生産の可能性が示唆されている。

このように本書は、長期にわたる多くの織物生産地の観察と、ゲーム論や制度派経済学の概念装置を効果的に結びつけることによって、「商人」活

動による「取引契約」の束としての市場形成の実態を別出した大変興味深い書である。日本の織物業史研究に携わったことのある筆者にとって、本書の魅力はなによりもその臨場感にあった。筆者は明治期の一織元の経営帳簿から、織元—織子の取引の様相、糸の窃取や納期の遅延といった現象を再構成したことがあるが、本書に集められている現代ラオスの小売店・織元・織子の語りは、それらを眼前に浮かび上がらせるものであった。さらに歴史研究ではなしえない、織物の特性を踏まえた多数の織物業者への聞き取り、そしてそれを整理するための理論的な道具立てによって、いままでは曖昧さの残っていた議論に対して、納得のいく形で解釈が示されている点も多い。糸信用貸契約と問屋契約の峻別はその好例であるし、筆者の研究に引き付けた一論点を挙げれば、織元が好況期に織賃の引き上げに加え余分な原料糸支給を行っていた理由が、著者のいうサブ・システムとしての贈与交換の概念を導入することで、よく理解できるようになった。

以下、本書での織物業を基盤とした市場形成論を、日本経済史・織物業史からの知見と照らし合わせ、やや外在的ではあるが、書評の責めを塞ぎたい。ヴィエンチャン市内のタラートの小売店と織子との「強い関係」の分析は、本書の中核をなしているといつてよい。他方、日本の近世・近代の織物業史の中で、大消費地・集散地と生産地のこの近接性は、京都西陣の高級絹織物業に類似の様相がみられるものの、必ずしも大きな部分を占めてはこなかった。産地織物業が一つのキー・ワードとなっているように、織物業は消費地から距離を置いた、地方立地の地場産業としての展開の中で生産の拡大を見せている。著者がしばしば参照している両毛機業地（桐生・足利）もそうであるし、筆者が対象とした19世紀末から20世紀初頭の埼玉県入間地方も、交通事情を考えれば東京近郊とは言い難いであろう。そこでは、必ずしもハイエンドの市場向けではなくとも、強い競争力のある製品の市場化が、地域内での商人の発生と成長、分業構造の展開と集積の効果等によって実現していた。その一方で、ラオスの高級シン（紋織物）にみられる、意匠の独自性と流行現象は、

日本の繊維産業の中では、戦後に花開くアパレル産業の分野で強調される要素であった。実際、アパレル産業の主要部分は大都市立地型でデザイナー（ラオスのシンでは図案師の位置にいる）の意義が大きい。この、意匠デザイン力が重要で大都市立地の中小工業では、たとえば1920-60年代の東京の玩具生産なども念頭に浮かぶ。そこで頻発する、下請業者が製造問屋から預かった「型」を流用し、第三者に製品を販売する事態は、本書が強調する織柄の剽窃と同根の問題から派生する現象であった。しかしその中でも、玩具生産は急成長を遂げている。一方産地織物業では、産地内で開発された意匠を、窃取の対象ではなく、産地ブランドとして織元間で共有化する方向が現れてくる。この様にみると、本書で明らかにされた市場形成の過程、特に高級品のシンにみられる個人的統治の特徴がカバーするのは、織物業における市場取引の発展過程において、重要ではあるが、ある特定の局面に限定されるものであった。しかし一方で、そこに内包された市場形成の論理は、織物業に限らず、大都市立地の産業分野に共有される問題領域であった。その意味で、本書の内容は広い視野から検討されるべき内容を豊富に備えているといえる。

それは、たとえば市場形成と産業における技能形成のとのかわりにも現れている。高級シンの生産には、一定以上の技能を有する織子の確保が不可欠であり、それが市場形成の在り方——取引契約の選択等——にも一つの規定要因となっていた。しかし本書では、この技能はディアスポラ集団に継承され、いわば市場取引の外から与えられるものとして位置づけられるに留まっている。一方、たとえば京都西陣などでは、徒弟制度による技能形成の内生化が重要な論点であるし、内機経営に技能伝習の機能を見出す見解も提出されている。本書で触れられている、世帯内での製織技能の継承——母から娘へ——も、それが婚姻等を通じて拡散・普及するか同一集団内にとどまるか、とどまるとしたらその条件は何かなど、検証されるべき論点は少なくない。たしかに著者の主要な関心は経済学的な意味での「市場形成」であり、本書はそこに議論を絞りこむことで、収集した多

様な情報の中から、体系的な理解を紡ぎだすことに成功した。その意義を十分に認識したうえで、著者の市場形成論への焦点の当て方が、本書の豊かな内容が産業発展をめぐる議論へと広く展開する余地をやや狭めている印象をもったことは、筆者の望蜀の感として記しておく。

最後に、織物業におけるジェンダー分業の問題について触れておこう。ラオス手織物業で印象的なのは、製織工程を担う織子のみならず、小売店や織元も、女性が担い手として活躍していることである。日本の産地織物業でも西陣などでの職人的な性格を有する織手を除けば、製織工程を担ったのはほぼ女性であった。しかし織元その他の織物関係者の大部分は男性で占められている。さらに明治期の入間地方の間屋契約の事例では、実際の織子が農家世帯内の女性であっても、帳簿の契約主体としては男性名（農家戸主）が挙がっていることがほとんどであった。日本とラオスの織物業は、織物＝女性のジェンダー・イメージが共通するようであり、それを支える構造は大きく異なっていた可能性がある。それは、ラオスの織子の独立志向や、織元経営への参入・退出の在り方にも影響を与え、個人的統治の機能を左右する要素であったかもしれない。本書の成果は、市場形成と社会構造との関係を考える上でも、示唆的な内容を含んでいると思われる。

（谷本雅之・東京大学経済学研究科）

堀江未央、『娘たちのいない村——ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会、2018、v+348p.

本書の冒頭で、著者は、2010年3月に雲南省のラフの村での住み込み調査を始めた頃、「どうしてラフの村にはこんなにも女性が少ないのか」（p.1）という疑問を抱いたと述べる。ラフの村に若い未婚女性がほとんどいないのは、1990年頃から多数の女性が内陸部の農村地域に婚出したからであった。この現象の背景には、内陸部農村地域において、一人っ子政策の実施で男女比の均衡が崩れたことや、多くの女性が都市に出稼ぎに出たことな